

作家・演出家・映画監督

# 鴻上尚史

KOKAMI SHOJI



INTERVIEW

其の1

**縁** 四国中央市  
富郷町寒川山・猿田地区

其の2

**縁** 川之江高校演劇部

著書・テレビ・雑誌 など  
たびたび登場する本市との **縁**

作家・演出家、映画監督など多数のジャンルで活躍する鴻上尚史氏の著書や出演番組では、たびたび四国中央市と思われる表現や情景が登場します。

「鴻上さんは、隣の新居浜市出身のはず…」と思いながら、著書や聞き込みを中心に調べてみると、何と本市と驚きの縁があることを発見！

日本の演劇界をリードし続ける鴻上尚史氏から、公演や稽古の合間の貴重な時間を頂き、その驚きの縁を聞くことができましたので、ご紹介します。

四国中央市にも  
いろいろと『縁』  
がありました…

**鴻上尚史** 1958年8月2日生まれ  
新居浜市 出身

早稲田大学法学部出身。大学在学中の1981年に劇団「第三舞台」を旗揚げ。以降、作・演出を手掛ける。「朝日のような夕日をつれて'87」(87)で紀伊國屋演劇賞、「天使は瞳を閉じて」(92)でゴールデンアロー賞、「スナフキンの手紙」(94)で岸田國士戯曲賞を受賞。戯曲集「グローブ・ジャングル」(2010)で読売文学賞戯曲・シナリオ賞を受賞。

舞台公演の他にも、映画監督、小説家、エッセイスト、ラジオ・パーソナリティー、脚本家、などとしても幅広く活動。  
桐朋学園芸術短期大学教授。

## Interview

僕が5歳のとき、  
両親の仕事の都合で  
富郷町の猿田地区に住むことに…。

36歳のとき、愛媛県で初開催の  
全国高等学校総合文化祭・演劇  
部門の審査員に。県代表校は…。



2023年3月発行

愛媛県新居浜市  
上原一丁目三番地

鴻上尚史 著  
(講談社)

愛媛県新居浜市出身の作家・鴻上尚史、初の自伝小説集！今回掲載されているエピソードも掲載されており、作家・鴻上尚史の原点を見ることができる傑作小説。



第1幕

エピソード① 出会い (5歳)

両親の仕事で富郷町寒川山・猿田地区へ

「僕の両親は教師をしていてね、5歳のときに夫婦揃って山奥の猿田小学校（四国中央市富郷町寒川山）に勤務することになったんだよ。小学校の隣に教員宿舎があって、僕は、そこで両親と一緒に住んでいたんだよ」

鴻上さんは、かつての富郷地区を記録した写真集を机に広げ、記憶の糸をたぐり寄せながら、幼少期のことを振り返ってくれた。

（写真集の小さな池を指差して…）「いやあ、本当に懐かしいな。僕は5歳だったから、小学校に通う年齢ではなかったけど、宿舎に一人であるのが退屈だったから、両親が授業をしている教室に行っただよ。したら教室中が大騒ぎになってね。それから学校に行くことを禁止されたんだけど、ヒマだったから、学校の目の前にあつた水の澄んだ小さな池に行つて、魚を捕まえようとしたら、池に落ちて、溺れちゃつてね。近所の人に助けってもらつたんだ」

一命を取り留める出来事もあって、5歳の鴻上少年は、ご両親の相談のもと、親元を離れ、祖父母のいる新居浜市

で暮らすことになった。

「僕が猿田地区に住んだ期間は、1か月間だけだったけど、親が猿田小学校に勤務していた5年間は、親に会うために毎年夏休みに猿田地区を訪れたんだよ。

集落の子どもの人数も娯楽も少ない時代だったから、上級生から下級生まで近所の子どもたちが一緒になって、小学校のグラウンドで鬼ごっこや陣取りをして、一日中遊んだなあ。

そういえば、小学校を下つた所に小さな商店が1軒あって、そこに住んでいた岩崎くんっていう少し年上の子と一緒によく遊んだことを覚えてるよ」と、今回出版された本にも掲載されていない仰天エピソードを昨日の出来事のように鮮明に説明してくれた。

「母は、大保木村（今の西条市）という山奥の集落の出身で、庭にたくさんのお花が咲いていてね。猿田地区もたくさんのお花が咲いていたから、小さな僕は、親近感を持っていたかも知れないなあ」と、猿田地区に抱いていた親しみの理由を話してくれた。



V1



平成12年

# 川之江高校演劇部

平成12年の全国高等学校総合文化祭・演劇部門で日本一の栄冠に輝いた川之江高校演劇部

V2



平成13年

翌年は、大会史上初となる2年連続の最優秀賞を受賞。川之江高校演劇部の名は、一躍全国区となった。

# 猿田小学校



昭和54年に閉校した猿田小学校。写真右下に見える教員宿舎に5歳の鴻上尚史さんは、両親と住んでいた。



鴻上少年が溺れた池は、今も澄んだ水が流れている。かつて小学校があった跡には、石碑が建てられている。



「この年まで、愛媛県の高校生は演劇文化交流が禁止されていたから、厳しい地方大会を勝ち抜き続けた他の高校と比べると、地元高校の作品は、少年野球がプロ野球の中でプレーしているようなものだったよ」と、鴻上さんは演劇の世界を分かりやすい例えを用いて評価した。

「終演後、僕は顧問の先生や生徒たちに、少しでも良くなって欲しいと思って、細かく、丁寧にアドバイスをした

このとき、愛媛県代表として出場したのは、「川之江高校演劇部」であった。

第2幕

エピソード② 再会 (36歳)

## 川之江高校演劇部との縁、そして偉業へ

そして時は流れ、36歳のとき、劇作家・演出家としても名を馳せていた鴻上さんの下に、地元・愛媛県で初開催となる全国高等学校総合文化祭・演劇部門の審査員として依頼が舞い込んだ。

本来であれば、中四国ブロックを勝ち抜いた作品が出場できる同大会だが、愛媛県で開催されるとあって「主催地枠」として地元で出場できる高校が愛媛県に1校だけ与えられた。

ただ、高校の演劇部は全国約2000校もの学校が頂点を目指し、頑張っているからね。高校球児の憧れの甲子園だって、全国約3500校の高校だから、決して少ない数じゃないんだよね。

だからこそ、全国大会出場の常連校や優勝校は、演劇の

世界を目指す高校生が全国から自然と集まるぐらい地元は評価しても良いと思うよ。

そして、まちには1000〜2000人規模の劇場ではなく、集客しやすい3000人規模の小さな劇場があれば良いね。そうすれば、背伸びをせず演劇に取り組めるから、ますます演劇が盛んになるし、演劇以外にも音楽やカラオケなど、いろんな文化やコミュニケーションも生まれ、まちが笑顔で明るくなると思うなあ」と、川之江高校が成し遂げた偉業を讃えつつ、地域の活性化に温かなアドバイスと期待を寄せた。

終幕

エピソード③ 若者たちへ (65歳)

## 自分が輝くことのできる場所を

東京で活躍する鴻上さんは、これから社会を支える若者や地域の活性化について、こう話してくれた。

「四国は、大阪や九州と比べると人口や産業などのデータはどうしても見劣りしてしまふ。

だからと言って、若者が夢を叶えるためにと上京しても夢を叶えることのできる人間は少ない。実際、演劇を目指す若者は多いけれど99%の人

間がプロになれない厳しい世界。それでも、若者は、一度故郷を離れて生活すると良いと思う。

それは、普段、自分が気付かなかった故郷の良さや財産に気付くことができるから。自分が輝くためにも、客観的に故郷を見つめ、離れなければ分らなかったこと、当たり前だと思っていたことを知り、選択すれば良いと思うね」と…。

FIN